

日本小学生バレーボール連盟 平成27年度運営基本方針

はじめに

本連盟の母体である公益財団法人日本バレーボール協会（以下JVA）は、1月にバレーボール2015宣言（ミッションステートメント）「JVAはバレーボールの“つなぐ力”を世界に育みます」を發表しました。その宣言では「バレーボールのつなぐ力は、自分のからだところのつながり、自分とひととのつながり、ひととひとのつながりを大切にする人を育みます」とも述べられています。これは、私たち日本小学生バレーボール連盟（以下日小連）が永年言い続けてきた「バレーボールを通して人間力を育成しよう。」という願いそのものだと思います。本連盟のキャッチフレーズである「ど真ん中に子どもがいる日小連」の下、〈つなぐ力〉を広め、そして、強めていきたいと思っております。

競技人口の拡大

ここ数年、バレーボール人口の減少は著しいものがあり、国民的スポーツであったバレーボールがこのままではマイナースポーツへと転落してしまう危機的現象が起きています。

本連盟としては、JVAゴールドプランプログラムを主体的・積極的に取り組み、減少に歯止めをかけ、更に増加させる努力を継続してきました。全国大会における男女混合の部の創設もその一つです。平成27年2月末現在、前年の同時期に比べ、男子は100チーム、1,600人以上の登録増となりました。女子においては、減少はしているものの100チーム、1,500人に止まり、着実に成果が出てきていると思います。これも、各都道府県役員及び指導者のご尽力の賜物です。アニメ「ハイキュー」の効果もあり、今、微風ではありますが競技人口拡大へ向けての追い風が吹いています。この機を逃すことなく、競技人口拡大に向けより一層主体的・積極的取り組みを推進していきたいと思っております。都道府県においても実情に合わせた競技人口拡大の積極的取り組みをお願いいたします。

成功させようファミリーマートカップ第35回全日本バレーボール小学生大会

今年度は、男女混合の部が創設して2回目の大会となります。昨年は、男女混合の部に38都道府県から参加がありました。いろいろ課題はありますが、男女混合の部創設の思いを共有し、一人でも多くの選手が、一つでも多くのチームが参加できる大会にしていきたいと思っております。また、今年度からベンチスタッフの義務化が最終段階にはいります。義務化の内容をしっかりと把握し、各都道府県においても混乱のないよう対応をお願いいたします。

今年度は第35回の記念大会です。特別なイベント等は計画しておりませんが、諸先輩に感謝するとともに未来へつながる大会を意識し、いろいろな場面でこのことを前面にだしていきたいと思っております。

JVAの財政状況は今年度も昨年以上に厳しく、より一層自主的な運営が求められております。徹底的なリストラを図るとともに、日小連、都道府県小連、さらにチーム指導者の一人一人が自分たちで創っていく大会、みんなで運営していく大会、という意識をこれまで以上に持つことが大切です。みんなで力を結集し、全国大会を、そして、それにつながる都道

府県大会を成功させましょう。

体罰・暴力根絶に全力を

日小連倫理委員会を中心に各都道府県連盟でも、体罰・暴力をなくするために様々な取り組みを行ってきています。指導者の意識も変わり、確実に減ってきてはいるとは思いますが、平成26年度もJVAのホットラインをはじめ、日小連事務局、各都道府県の関係機関等に数多くの訴えがありました。言葉による暴力をはじめ、中には残念ながら厳罰に処さざるをえないような事案もありました。日小連は倫理委員会を中心として、あらゆる機会を通して強いリーダーシップを発揮しこの問題に取り組む所存です。各都道府県連盟におかれましては、これまで以上に言葉の暴力をはじめ体罰・暴力根絶に向けて、倫理委員会の設立、宣誓書のとりまとめ等々、具体的な取り組みを強力に粘り強く推し進めていただくことをお願いいたします。

指導者・審判の資質向上と人材の育成

平成26年度も、一次、二次、三次講習会を全国16会場で実施できました。新しい指導者の参加も多い一方、たくさんの方に日体協公認指導員の資格も取得していただきました。更に、JVAC級審判員の資格も多くの方に取得していただきました。日体協資格取得のための受講済み措置は当初の予定では今年度(27年度)で終了でしたが、まだまだ受講者が多いこと、競技人口拡大には指導者増加が不可欠であること、体罰・暴力撲滅に向けて正しく楽しい指導方法を浸透させる必要があること、等々のことから、この措置を3年間延長していただくことになりました。(平成30年まで)各ブロックで話し合い、効率的に計画し一人でも多くの指導者の方に受講していただく取り組みをお願いいたします。

昨年度もお願いしましたが、JVAのMRSに登録せず、自分たち独自で活動し大会を開催している団体への取り込みも是非ともお願いいたします。日本バレーボール界を支えるためにも登録し共に歩むことの重要性を訴え続けていかなければならないと思っています。

自主・自立に向けて

ここ数年、母体であるJVAから補助金の削減が続いております。これまでは、弱小の組織であることを理解していただき、小学生連盟を育てていただけてきました。しかし、昨今の事情を考えると、いつまでもJVAに頼ってはいられない状況です。

JVAという傘の外に出るということではありませんが、自分の手足を鍛え、自分で歩けるところは自分で歩かなければならないと思うのです。

具体的には、全国大会、指導者講習会等々、少しずつ自主的運営に向けて踏み出していきたいと思います。そのためには、何よりも47都道府県小連が一枚岩になることが大事です。

本連盟ロゴマークの下「日小連は一つ」の思いで、より風通しを良くし、意識連係はもとより行動も連係できる組織創りに全力を尽くします。

分かり合って・わかちあって、新しい一歩を踏み出しましょう！

平成27年度 日本小学生バレーボール連盟 審判規則委員会 運営基本方針

1 基本方針

- (1) バレーボールのひとやところをつなぐ力を通して、小学生の豊かな人間性の成長とバレーボール技術の向上と小学生バレーボールの普及に努めるため、体罰・暴力・暴言を用いた指導を許さない。
- (2) 小学生バレーボールの在り方について共通理解を図り、新たな視点から競技規則を検討し、小学生バレーボールにふさわしい競技規則を策定していく。
- (3) 小学生の生命の安全を確保するとともに、災害発生時の対応と健康に十分配慮した試合運営を行う。
- (4) 指導者と審判員が互いの立場を尊重し共通理解を図り、試合を進めることの大切を理解する。
- (5) 若年層の人材発掘、若手審判員の育成に重点を置くとともに、国際大会、Vリーグで活躍できる審判員を育成し、その技術を小学生バレーボールの審判に還元する。

2 具体的な方策

- (1) 審判員の立場から、審判講習会等の機会において体罰・暴力・暴言が小学生の人間的な成長及び技術向上に一切不要であることを伝え、発見した場合は隠ぺいせず適切な対応を取り、必ず報告をする。
- (2) 各都道府県において、理事会等の様々な機会を使用し、小学生バレーボールに相応しい競技規則について検討し、日本小学生バレーボール連盟に提案する。
- (3) 災害発生時の対応について、大会時、練習時を問わず、常に意識した運営を心掛ける。
- (4) 試合や講習会等において、チームの指導者や子どもに対して積極的にルールを理解を図り、正しく確実に伝えることで、相互の信頼関係を築いていく。
- (5) JVAメンバー制度への参加を積極的に進め、小学生連盟所属審判員の国際大会、Vリーグ等への参加について、審判委員長は積極的に各都道府県協会に働き掛ける。

3 平成27年度の重点指導項目

- (1) 全国大会、都道府県大会においてグリーンカードを適用し、子ども達の健全育成に効果的な活用方法を伝え、広げていく。
- (2) 体育館において、コート上の子供をはじめ、観客席など子供や保護者も念頭に置き、地震発生を想定した避難訓練を必ず実施する。
- (3) 三次講習会においてC級審判員資格を取得した指導者に対して、審判技術の向上のための研修会等に参加しやすくするため、研修会の情報を提供するとともに、積極的に指導者の審判資格所得を推進する。
- (4) 審判資格保有者は、毎年MRS登録を完了すること。

グリーンカード

日本小学生バレーボール連盟の根本の考えは、バレーボールを通して子どもたちの健全育成を支えていくことにあります。ルールやマナー、スポーツマンとしての心得などをしっかりと身につけた良いプレーヤー・よい人間を育てていきたいと思っております。そのためには、子どもたちの好ましくない行為を指導するだけでなく、フェアプレーや善い行いは賞賛し広めていくことが大事であると考えます。グリーンカードを用いて、みんなが善い行いでつながっていきましょう。

「それは 善い行動である」と子どもたちに伝えるのがグリーンカードです。

グリーンカードを持つのは

大会役員、審判員です。

ありがとう

フェアプレー

J E V A

コートの上で

審判員は試合中の子供の行動を評価しましょう。

- 例 1 ミスをした選手に対して、積極的に励ましの声掛けをした。
- 2 不利な判定になる場合でも、正直に自己申告をした。
- 3 点差や状況にかかわらず、最後まで全力でプレーをした。
- 4 判定を素直に受け入れ、終始フェアな態度で試合を終えた。

使用するタイミング

選手に対して

- ・判定終了後、左手で選手を示し、右手でカード示す。

チームに対して

- ・試合終了時、サイドを挙げて、片方の手でカード示す。

コートの外で

大会役員、審判員、指導者が協力して子供の行動を評価しましょう。

- 例 1 礼儀作法など、基本的な習慣が他チームの模範になる。
- 2 ラインジャッジなど、補助員の役割に真剣に取り組んでいる。
- 3 会場のゴミを拾うなど、施設や用具を大切に扱っている。
- 4 チームのためにボール拾いや応援を頑張っている。

使用するタイミング

適切なタイミングで使用し、子供にフェアプレーの大切さを伝えましょう。

第34回全日本バレーボール小学生大会

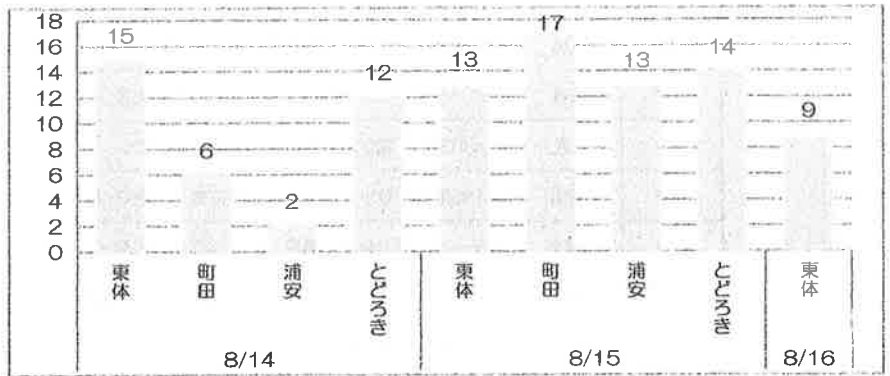
【審判部報告】

2014年9月19日

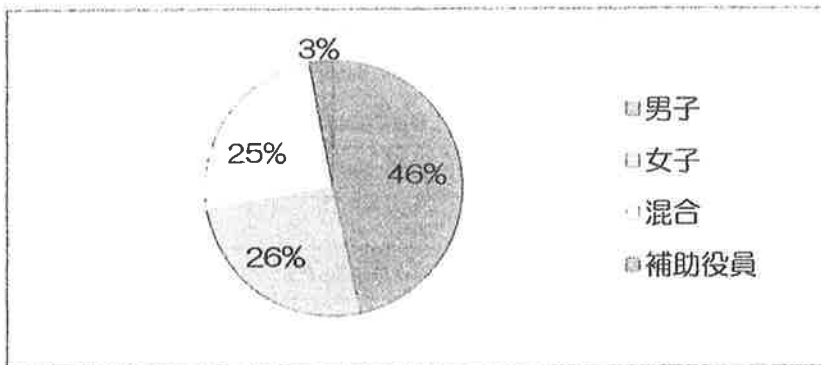
グリーンカード

- ✓ 監督会議時に説明
- ✓ レフェリークリニック時に、審判員及びチーム関係者に実技にて説明
- ✓ 審判員に文書にて説明
- ※ゲーム中は、流れを切らないように適用をして欲しい。
- ✓ 結果8月14日～16日間で、審判員がグリーンカードを示した数は、101枚でした。
- ※所沢会場は、総務集約の為、101枚に含まれていない。

各会場実績



- ✓ 種別別では、男子が全体の46%と半数近くを占めた。

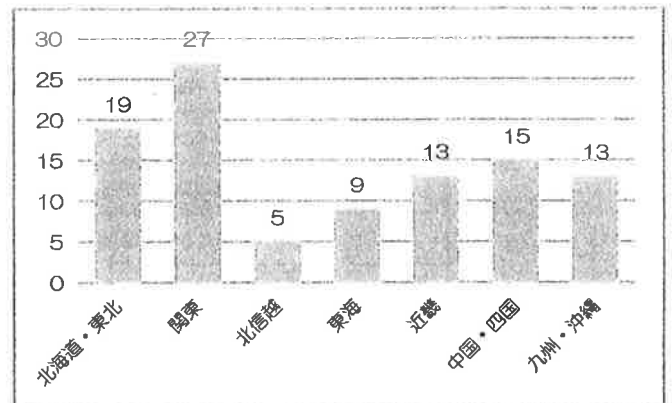


男子 47枚
女子 26枚
混合 25枚
補助役員 3枚

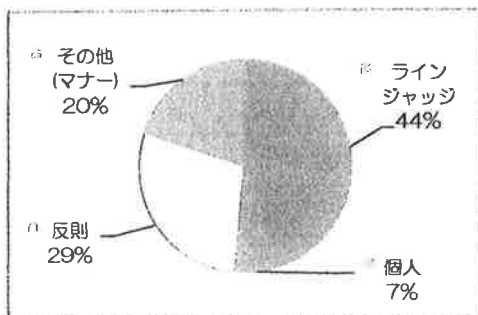
※最終日には、東京の補助役員や閉会式のお手伝いの子供達にもカードが出されました。

- ✓ ブロック別では、関東が27枚とトップ、

- ※関東
 - ・男子 10枚・女子 5枚・混合 9枚・補助役員 3枚
- ※北海道・東北
 - ・男子 10枚・女子 4枚・混合 5枚
- ※中国・四国
 - ・男子 4枚・女子 4枚・混合 7枚



- ✓ 内容別ではラインジャッジが45枚とトップ



※内容別で反則に対するものも、29枚あり同じ選手が何枚も貰っている。
また、種別別で見ると男子が20枚と多く女子は2枚と開きがある。

第34回全日本バレーボール小学生大会

【審判部報告】

2014年9月19日

✓ 内容一覧

会場	種別	都道府県	内 容
東 体	混合	福岡	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
	男子	大分	全体的に礼儀正しい。公式練習中も相手チームの応援をしていた。
	男子	茨城	No.1の選手 判定に対し素直に手を挙げた。
	女子	広島	No.1の選手 判定に対し素直に手を挙げた。
	女子	福島	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。上級生が下級生を上手に指導していた。
	男子	三重	No.4の選手 判定に対して素直に手を挙げた。
	男子	神奈川	No.1の選手 タッチネットの判定に対し手を挙げた。
	女子	開催地	2チーム合同で補助役員をした。テクニカルタイムアウト時に他のチームに水筒を渡してあげる気づかい。
	女子	岡山	両チームとも試合を通してマナー良くゲームに取り組んでいた。
	女子	奈良	両チームとも試合を通してマナー良くゲームに取り組んでいた。
	男子	石川	モップがけをしている選手に対して「ありがとう」と感謝してほめていた、監督とコーチが声を掛けていた。(大人)
	男子	三重	ラインジャッジを一生懸命取組み、難しい判定もしっかりとこなしていた。
	女子	群馬	No.1の選手がラインジャッジをしながら、点示の下級生の面倒をみてゲーム運営に協力してくれた。
	男子	茨城	No.2の選手 ボールコンタクトの判定に手を挙げて素直に認めた。
	男子	東京	No.1の選手 ボールコンタクトの判定に手を挙げて素直に認めた。
8/14 町 田	男子	鳥取	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。(2回)
	男子	宮崎	No.1の選手 判定に対し素直に認め、相手チームにボールを送った。
	女子	長崎	コート内にタオルが落ちたのを、ラインジャッジが拾ってくれた。
	男子	秋田	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
	男子	秋田	No.2の選手 チームメイトにフラッグシグナル等を指導していた。
	混合	高知	ゲーム終了後、ネット撤収を積極的に手伝ってくれた。
浦 安	男子	福岡	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
	男子	千葉	隣のコートから入ったボールを素早く取りに行ってくれた。
とどろき	混合	滋賀	早くから補助役員の準備をしていた。
	男子	滋賀	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
	女子	神奈川	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。担当する試合前に練習をしていた。
	男子	長崎	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
	女子	沖縄	開始、終了の握手後、選手全員が審判員に挨拶をした。
	男子	山形	点示中に隣のコートへ侵入したボールを選手よりも早く取りに行った。
	女子	長野	ラインジャッジを一生懸命取組み、難しい判定もしっかりとこなしていた。
	女子	南北海道	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。行動が機敏で気持ち良かった。
	女子	新潟	試合を通してマナー良くゲームに取り組んでいた。
	混合	茨城	試合終了後、チーム全員でベンチの掃除をして帰った。
	混合	茨城	昼食休憩後の補助役員で、開始5分前には集合していた。
	混合	宮城	全試合終了後、本部席前にてチーム全員で挨拶をして帰った。

第34回全日本バレーボール小学生大会

【審判部報告】

2014年9月19日

8/15	東体	混合	福岡	ラインジャッジをしている上級生が、点示をしている下級生に指導していた。
		女子	京都	両チームともラインジャッジを試合を通して集中して取組んでいた。
		女子	奈良	両チームともラインジャッジを試合を通して集中して取組んでいた。
		男子	栃木	No.3の選手 判定に対して素直に手を挙げた。
		混合	長野	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
		女子	京都	両チームともラインジャッジを一生懸命取組み、難しい判定もしっかりとこなしていた。
		女子	石川	両チームともラインジャッジを一生懸命取組み、難しい判定もしっかりとこなしていた。
		女子	奈良	両チームともラインジャッジを試合を通して集中して取組んでいた。
		女子	岩手	両チームともラインジャッジを試合を通して集中して取組んでいた。
		男子	静岡	No.4の選手 判定に対して素直に手を挙げた。
		女子	鳥取	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
		男子	山梨	No.4の選手 判定に対して素直に手を挙げた。
		男子	山梨	No.5の選手 判定に対して素直に手を挙げた。
		8/15	町田	混合
混合	開催地			No.4の選手 判定に対して素直に手を挙げた。
男子	沖縄			No.1の選手 どんなに苦しい場面でも、チームメイトに声を掛けまわりまとめていた。
男子	秋田			ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
混合	山梨			No.1の選手 一生懸命にモップをかけていた。
男子	兵庫			No.1の選手がタイムアウト開けにボールを取りに副審の処に来てくれた。
男子	秋田			No.3の選手 タッチネットの判定に対し手を挙げた。
混合	開催地			No.2の選手 キャッチ判定に対して素直に手を挙げた。
混合	開催地			No.4の選手 タッチネットの判定に対し手を挙げた。
混合	開催地			No.1の選手 タッチネットの判定に対し手を挙げた。
混合	岡山			ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
混合	南北海道			点示員が、モップ所定の位置に動かしてくれた。
混合	東京			ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
女子	青森			ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
8/15	浦安	混合	岡山	No.6の選手 ボールコンタクトの判定に手を挙げて素直に認めた。
		混合	香川	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
		男子	岩手	No.7の選手 タッチネットの判定に対し手を挙げた。
		男子	島根	試合後、相手チームの監督へ行き挨拶、握手をしに行っていた。
		男子	宮崎	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
		混合	山形	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
		混合	山形	試合終了後、キャプテンのサイン後に「ありがとうございました」と記録席前で挨拶をして去った。
男子	大分	マナーが良く特にあいさつはしっかりとしていた。		
男子	和歌山	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。		
男子	北北海道	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。		

第34回全日本バレーボール小学生大会

【審判部報告】

2014年9月19日

		男子	島根	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
		男子	神奈川	判定に対し素直に手を挙げた、試合終了後に審判団に挨拶に来てくれた。
		女子	神奈川	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
		女子	香川	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
		男子	神奈川	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
		男子	高知	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
	とどろき	男子	宮城	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。キャプテンが点示の下級生を気にかけていた。
		女子	福岡	No.1の選手 タッチネットの判定に対し手を挙げた。
		男子	三重	得点の間違えを指導したら、丁寧なお礼の言葉が返ってきた。
		混合	高知	公式練習中に、4人でラインジャッジのシグナルを確認していた。とても一生懸命に取組んでいた。
		混合	愛媛	No.2の選手 反則を認めて手を挙げた。
		混合	愛媛	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
		混合	福島	補助役員担当時、忘れ物を本部に届けてくれた。
		女子	宮崎	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。
		男子	大阪	No.2の選手 落し物を本部に届けてくれた。
女子		和歌山	全試合終了後、選手全員で本部前への挨拶をし、コート掃除をしていた。	
女子		茨城	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。	
男子		宮城	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。	
男子		大阪	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。	
男子		三重	No.5の選手 タッチネットの判定に対し手を挙げた。	
8/16	東体	補助役員	東京	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。(Eコート)
		補助役員	東京	東金町の子供たちが、閉会式終了後、積極的に椅子の片づけをしてくれた。
		男子	岩手	No.7の選手 タッチネットの判定に対し手を挙げた。
		補助役員	東京	ラインジャッジを一生懸命取組んでいた。(Bコート)
		男子	静岡	No.4の選手 判定に対して素直に手を挙げた。
		男子	静岡	No.3の選手 判定に対して素直に手を挙げた。
		男子	静岡	No.6の選手 判定に対して素直に手を挙げた。
		男子	静岡	No.5の選手 判定に対して素直に手を挙げた。
		男子	滋賀	No.7の選手 判定に対して素直に手を挙げた。

✓ まとめ

初めての試みとしては、ますますではないかを感じる。特に男子チームが多かったのは意外でした。また、内容別では、反則に関するものが、29%と数字に表れたのはクリニック時に説明したことを、チーム関係者が選手に伝えてくれたものと考えます。今後も継続して行くうえで、審判員としてのどのタイミグで出すか？いつ出すか？等を検証していく必要があると感じました。全国の情報を吸い上げて、より良いものになるように審判委員会として検討を重ねていく必要がある。

公益財団法人日本バレーボール協会

第6期(2015年度)運営基本方針

(2015年4月1日-2016年3月31日)

本会は、わが国におけるバレーボール界を統轄し代表する団体として、グローバル化、ポータレス化、情報化、少子高齢化などの急激な環境変化の中、バレーボール競技の普及、振興および発展を図り、児童・青少年から高齢者に至るまで、国民の心身の健全な発達、維持および人間性の向上に寄与し豊かな社会の形成に貢献するため、本年度は以下の基本方針に基づき事業を推進する。

更に、本年1月に制定したミッションステートメント（宣言）「JVAはバレーボールの“つなぐ力”を世界に育みます」の本会組織内への浸透を図り、併せてバレーボールに携わる者すべての、心と技・体、自分と人、人と社会の健全な「つながり」を育んでいく。

▶ バレーボール力の強化

「すべての道が2020東京オリンピックに通じる」ことを念頭に

1. 代表チームから若年有望選手まで、2014年度に構築した一貫した選手強化体制により、2020年を念頭に置いた強化を実施する
2. 2016リオデジャネイロオリンピックへの出場権獲得に向け邁進する
3. ビーチバレーボール選手の発掘・育成・強化および競技会の企画・運営に全力で取り組む
4. 選手の発掘・育成のために、指導者の資質向上と指導カリキュラムの刷新を推進する
5. JVAゴールドプランを通じて、未経験者・経験者の小・中学生など若年層競技人口の増加・拡大を図る

▶ 組織力の強化

1. 迅速な意思決定のため、組織強化、改革、情報収集、人材登用を行っていく
2. 経費削減とマーケティング力の強化により収益増を図り、財務基盤を強化する
3. JVA加盟団体との情報共有、意思疎通を図っていく
4. バレーボール界における法令の順守と暴力・体罰の根絶に向けた対策を推進していく

▶ 国際力の強化

1. 国際バレーボール連盟およびアジアバレーボール連盟への参画・連携を強化する
2. 日本バレーボールのプレゼンスを向上し、バレーボール先進国として事業を効果的に推進する

公益財団法人 日本バレーボール協会
第6期（2015年度）国内事業本部基本方針
（2015年4月1日～2016年3月31日）

公益財団法人日本バレーボール協会の第6期（2015年度）運営基本方針に基づき、国内事業本部として「国内事業本部基本方針」を定め、事業を推進する。

国内事業本部は、日本のバレーボール界の現状と将来構想を念頭に「今できること」「今やらなければいけないこと」それがバレーボール界の将来にとって重要な課題と考える。

バレーボール競技の特性である「つなぐ」をモットーに、日本バレーボール協会とバレーボールファンをつないだり、競技会とバレーボールファンをつないだり、競技会と競技会をつないだり、競技会と講習会をつないだり、事業の成果を最大限に追求するために効率化を推進する。

- 1、国内事業本部は事業の普及・発展のために、各委員会と連絡を密にし、情報を共有して各事業を展開する。
- 2、ビーチバレーボール競技を日本体育協会主催の国民体育大会において正式種目とすることを提案しており、引続き推し進める。正式種目採用に向けて、ビーチバレーボール事業本部と協力して、組織の整備、指導者・審判員の人材発掘・育成を推進する。
- 3、2020年東京オリンピックに向かって、JVA ゴールドプランでバレーボール競技人口（特に若年層）の拡大、増加を図り、さらなるバレーボールの普及・発展を目指す。
- 4、国内競技会については、「天皇杯・皇后杯全日本バレーボール選手権」を6人制競技会の頂点として、各カテゴリーや都道府県協会と連携を強め、魅力ある「日本一の大会」を目指し、本大会を中心として6人制バレーボール競技会を普及・発展させる。また、9人制競技会は「男女総合選手権大会」というトップの大会を軸として、9人制バレーボールを普及・発展させる。また、生涯スポーツの大会の普及・発展を図る。
- 5、日本体育協会の有資格指導者を増加させて、すべてのカテゴリー及び都道府県の指導者に正確な指導法の普及・発展を図る。そのために、指導者のための各カテゴリー別指導カリキュラムの作成をする。そして有資格指導者の登録及び活動を推進する。
- 6、公認審判員・公認判定員の技術向上を図り、高いレベルで大会及び試合をコントロールできる人材の育成と増加を推進する。そのために、「試合運営」「講習会」「研修会」の統一カリキュラムの作成をする。また、ビーチバレーボールの審判員の発掘・育成が急務である。
- 7、日本バレーボール協会は「指導におけるガイドライン」に従って、さらなる「体罰・暴力の根絶」を推進する。そのために、「JVA 体罰・暴力の相談窓口」からの体罰・暴力・暴言などの相談にすばやく対応をする。また、競技会代表者会議・講習会・研修会・バレーボール教室等で体罰・暴力根絶の指導を再度徹底する。

バレーボール 2015 宣言

『JVA はバレーボールの“つなぐ力”を世界に育みます』

ボールを落とさずに“つなぐ”スポーツ。

決してひとりではできません。

チームメイトとネットの向こうの相手がいるから、できるのです。

チームメイトとともに力を合わせ、

次にボールに触れるチームメイトや相手に思いをめぐらせ、
勇気を持ってあきらめずボールを追いかけて“つなぐ”——。

みんながつなげた時に生まれる、見えない力。

その力には、ひとりではできないことができる力があります。

夢をかなえる力があります。

希望を実現する力があります。

この力をわたしたちは“つなぐ力”とよびます。

さあみんなで“つなぐ力”を体験しましょう。

子どもから生涯にわたって“つなぐ力”を楽しむスポーツ。

それが、バレーボール。

このスポーツは、つながっている。

バレーボールの“つなぐ力”は、

- ☆自分のからだところの “つながり”
- ☆自分とひととの “つながり”
- ☆ひととひととの “つながり”

を大切にするひとを育みます。

◆自分のからだところの“つながり”を大切にするひと

自分に正面から向き合えるひと

- ・自分とむきあい、打ち克つところで粘り強く取り組むひと
- ・気力に満ちた元気なからだところ、能力を惜しまず発揮するひと
- ・勇気と情熱あるところで、自分の目標や夢にむけて努力するひと

◆自分とひととの“つながり”を大切にするひと

心と心のつながりを大切にするひと

- ・ひとを尊重し、誠実さと思いやりでひとと向き合うひと
- ・ひとを理解し、喜びも悲しみも分かち合う心を持ったひと
- ・ひとを大切にし、感謝する心を持っているひと

◆ひととひととの“つながり”を大切にするひと

家族・職場・地域社会とのつながり

- ・ひととひとをつなぎ、知恵を出会わせ、笑顔あふれるコミュニティーを創るひと

日本・世界とのつながり

- ・ひとの多様性を受け入れて、世界中の仲間との交流の輪を創るひと

過去から未来の時間のつながり

- ・社会・文化の過去と現在を理解し、未来をともに創るひと



公益財団法人日本バレーボール協会

「つなぐカムービー」を公開中！ ⇒⇒⇒



平成27年度 JVA国内事業本部 審判規則委員会 運営基本方針

平成27年度審判規則委員会の運営基本方針を以下の6項目とする。

- 1 ボールハンドリングをはじめ判定基準の統一を図り、公平・公正で手際の良い判定により、競技会の円滑な運営を行う。
- 2 選手・指導者を対象に、改正されたルール及びルールの取扱いについて説明を行い、以って競技力の向上に資する。
- 3 A級審判員資格取得審査講習会、ビーチ特別A級資格取得審査講習会を実施し、次世代を担う若手審判員の発掘、育成を図る。
- 4 男女共同参画をさらに推進し、女性審判員の活動を支援すると共に、メンタル面の強化及び審判技術の向上を図る。
- 5 国内競技会及び国際競技会の成功を期するため事前講習会を開催し、スコアラー・アシスタントスコアラー・ラインジャッジ・コートオフィシャルの質的向上を図る。特に、ラインジャッジについては、トレーニング計画を立て実践を通してレベルアップを図る。
- 6 情報企画委員会と連携し技術統計判定員のスキルアップを図り、客観的な判定にもとづく正確なデータの作成をめざす。

指導部：審判技術向上を目指し、レベルの統一と適切な講習会・研修会を開催する。また、審判員の責務として、チームに対しルールを正確に伝達し、ルールの理解を深めることで、さらなるバレーボール競技の発展に努める。

- (1) 公認審判員の技術レベルに応じたスキルアップ事業を推進する。特にA級審判員の技術レベルの向上を目指す。
- (2) 各カテゴリーのチームの選手・指導者に対しルールの説明を行う。
- (3) 若い年代の審判員を発掘し育成する。

規則部：見易く正確で分かりやすいルールブックの作成をめざす。また、9人制バレーボールの活性化を図るために、親しみやすいバレーボール競技を目指し、ルールの研究を進める。

登録部：JVAメンバー制度(MRS)に従って、公認審判員および技術統計判定員のMRS登録の増加を図るとともに、公認審判員、技術統計判定員の現状把握を行う。

以上

各種ルールの修正点・改正点について

1 6人制改正点・修正点

2014年10月31日、11月1日にイタリア・サルディーニャ島のカリアリで開催されたFIVB総会において、国際競技規則が一部改正された。

本競技規則は、この改正を踏まえて編集するとともに、条項番号、項目に網掛けをするなど見易くした。

●改正点

① 1.1 規格 (DIMENSIONS)

コートは18 m × 9 m の長方形で、最小限3 m の幅のフリーゾーンで囲まれている。フリープレー空間は、障害物が何もない競技エリアの上方の空間で、競技をする表面から、最小限7 m の高さがなければならない。 *付則の1

国際バレーボール連盟(以下FIVB)世界・公式大会では、フリーゾーンの幅はサイドラインから最小限5 m、エンドラインから最小限6.5 m なければならない。フリープレー空間は競技エリアの表面から最小限12.5 mの高さが必要である。

② 2.2 構造 (STRUCTURE)

ネットは縦幅1 m、長さは9.5~10 m (サイドバンドの外側は両端各25~50 cm)で、10 cm 角の黒い網目で作られている。(第3 図) *付則の4

FIVB 世界・公式大会では、その大会規定により、マーケティング契約に応じた広告をするためにネットの網目の大きさを変更することができる。

③ 3.3 ファイブボールシステム (FIVE-BALL SYSTEM)

FIVB 世界・公式大会では、1 つの試合に5 個のボールを使用する。この場合は、フリーゾーンの4カ所のコーナーと主審、副審の後ろに計6 人のボールリトリバーが配置につく。(第10 図)

④ 4.1 チーム構成 (TEAM COMPOSITION)

4.1.1 試合のために1 チームは12 人までの選手と、さらに次のスタッフで構成することができる。 *付則の6

※コーチングスタッフ：1 人の監督、最大2 人のアシスタントコーチ

※医療スタッフ：1 人のチームセラピストと1 人の医師

記録用紙に記入されているこれらのメンバーだけが競技コントロールエリアに入ることができ、公式ウォームアップと試合に参加することができる。

FIVB 世界・公式大会のシニアカテゴリーでは、14 人までの選手が記録用紙に記載され試合でプレーすることができる。(監督を含む)最大5 人のベンチスタッフは、監督自身によって決定され、記録用紙に記入され、O-2 (bis) に登録される。

FIVB 世界・公式大会では、医師とチームセラピストはチーム構成員の一員となるために、事前にFIVB から資格認定を受けなければならない。しかし、FIVB 世界・公式大会のシニアカテゴリーでは、医師とチームセラピストがベンチスタッフの5 人の中に含まれていない場合は、競技コントロールエリア内のフェンス付近に座り、審判員に要請されたときに限り、選手への緊急的な医療処置を行うことができる。

(たとえベンチにいなくても) チームセラピストは、公式プロトコール開始前まではウォームアップに参加してもよい。

- ⑤ 4.2.4 セット間は、選手は自チームのフリーゾーン内でボールを使い、ウォームアップすることができる。第2 セットと第3 セットの間の延長されたインターバルでは、(もしも使用するのであれば) 自チームのコート内でボールを使うことができる。

⑥ 4.5 禁止される物 (FORBIDDEN OBJECTS)

4.5.3 圧迫用サポーター (パッド入りの負傷部を保護する装具) は、保護やサポートのために着用することができる。

FIVB 世界・公式大会のシニアカテゴリーでは、これらのサポーターはユニフォームの部分と対応した同じ色でなければならない。

⑦ 6.1.3 ラリーと完了したラリー

ラリーとは、サーバーにより打たれたサービスの時点から、ボールがアウトオブプレーとなるまでの、一連のプレーの動作である。完了したラリーとは、一連のプレーの動作の結果で1 点が与えられたときをいう。これには、ペナルティやディレイインサービス (サービス時8 秒ルールの反則) も含まれる。

⑧ 7.2 公式ウォームアップ (OFFICIAL WARM-UP SESSION)

7.2.1 両チームが事前に試合コートでウォームアップしていたなら、ネットでの試合開始前の公式ウォームアップは、両チーム合わせて6 分間行うことができる。そうでない場合は、10 分間ウォームアップすることができる。

FIVB 世界・公式大会では、チームは両チーム合わせて10 分間のネットを使用したウォームアップをする権利がある。

⑨ 7.7 ローテーションの反則 (ROTATIONAL FAULT)

7.7.1 サービスが正しくローテーション順に行われなかったとき、ローテーションの反則となる。その場合は次のような順序の結果となる：

7.7.1.1 相手チームに1 点と次のサービスが与えられる。(規則6.1.3)

7.7.1.2 選手のローテーション順は正しく直される。

7.7.2 これに加え、記録員は反則がどの時点で発生したかを特定しなければならない。チームが反則をしている間に得たすべての得点は取り消される。相手チームの得点はそのまま有効となる。

反則発生の時点を特定できない場合には、得点の取り消しはなく、相手チームに1点と次のサービスが与えられる。(規則6.1.3)

⑩ 8.3 ボール “イン” (BALL “IN”)

ボールがフロアに接触したとき、ボールの一部でも区画線を含むコートに触れた場合はボール “イン” である。(規則1.3.2)

⑪ 9.2.4 削除

⑫ 11.3 ネットへの接触 (CONTACT WITH THE NET)

11.3.1 ボールをプレーする動作中の選手による両アンテナ間のネットへの接触は反則である。

ボールをプレーする動作の中には、(主に) 踏み切りからヒット (またはプレーの試み)、着地までが含まれる。

⑬ 11.4.4. プレーに対する (主な) 妨害 (規則11.3.1) :

- ・ ボールをプレーする動作中に、両アンテナ間のネット、またはアンテナに触れること。
- ・ 支持を得たり、身体を安定させたりするために両アンテナ間のネットを使うこと。
- ・ ネットに触れることにより相手チームに対して自チームが有利な状況を不正につくり出すこと。
- ・ 相手チームによる正当なボールへのプレーの試みに対し、それを妨害する動作をすること。
- ・ ネットをつかんだり、握ったりすること。

ボールがプレーされているときに、ボールの近くにいる選手やボールをプレーしようとしている選手は、たとえボールに触れなくてもボールをプレーする動作中とみなされる。

しかし、アンテナ外側のネットに触れることは反則ではない。(規則9.1.3を除く)

⑭ 15.1 正規の試合中断の回数 (NUMBER OF REGULAR GAME INTERRUPTIONS)

各チームは、1セットにつき2回までのタイムアウトと、6回までの選手交代を要求することができる。

FIVB世界・公式大会のシニアカテゴリーでは、スポンサー、マーケティングおよび放送局の合意に基づき、FIVBはタイムアウト、および(または)テクニカルタイムアウトの回数を1回ずつ減らすことができる。

⑮ 19.1.1 各チームは、記録用紙の選手リストの中から守備専門の選手であるリベロを2人まで指名することができる。(規則4.1.1)

FIVB世界・公式大会のシニアカテゴリーでは、チームが記録用紙に12人を超えた選手を記載している場合は、チームリストには2人のリベロを置かなければならない。

⑯ 22.2 手順 (PROCEDURES)

22.2.3.1 副審は、主審のハンドシグナルを追従する。(削除)

⑰ 22.2.3.3 バックプレーヤーまたはリベロのアタックヒットの反則あるいはブロックの反則をした場合は、規則22.2.3.1と22.2.3.2に従って主審と副審が示す。

⑱ 小学生バレーボール・フリーポジション制競技規則

第6条 ネット付近の選手

片方の足(両足)または片方の手(両手)がセンターラインを越えて相手コートに触れても、侵入している片方の足(両足)または片方の手(両手)の一部がセンターラインに接しているかその真上に残っていれば許される。他のいかなる身体の部分も相手コートに触れることは許されない。

第7条 選手交代の制限 (条, 繰り下げ)

第8条 記録の方法 (条, 繰り下げ)

●修正点

- 1 規則をより読み易くするため、単語訳や表記を見直し、字句を修正した。
- 2 公式記録用紙の3セットマッチ用、5セットマッチ用の用語の統一をした。

2 9人制改正点・修正点

本年度は、試合の効率化や運営上の観点から試合開始時の『主審のプレーボールの合図』を廃止し、セット間の中断の時間を『2分間』から『3分間』に改めました。また、試合中断の不当な要求があった場合の措置や、『ベンチ』を『チームベンチ』に改めるなど規定の整備を行うとともに、主審が吹笛したとき『副審は主審のハンドシグナルに追随する』規定を6人制と同様に削除しました。

● 主な改・修正点は、次のとおりです。

- 1 第5条（競技参加者の権利と義務）について、競技参加者の服装（第5項）に、「選手は、圧迫用サポーターを保護やサポートのため着用することができる。」を加えた。（第5条第5項5）
- 2 第7条（試合の開始とサービス権の移行）について、試合の開始と進行（第1項）から「主審のプレーボールの合図後、」を削除した。（第7条第1項1）
- 3 第11条（セット間の中断）について、「セット間の中断の時間は、3分間とする。…」に改めた。
- 4 第13条（選手交代）について、正規の選手交代（第1項）から「選手交代の要求が不当な交代として拒否されたり、試合の遅延となったときは、試合の再開後、一つのラリーがあった後でなければ、そのチームは再び選手交代を要求することはできない。」（第1項8）を削除し、9を8に繰り上げた。
- 5 第14条（試合中断の不当な要求と処置）について、処置（第2項）に「不当な要求があった場合において前項の規定が適用されたときでも、そのチームは同じ中断中に異なる種類の中断の要求をすることができる。」を加えた。（第14条第2項2）
- 6 第29条（主審）について、責務（第2項）から「第1セット開始時には、吹笛と公式ハンドシグナルでプレーボールを合図する。」（2(1)）を削除し、(2)以下を1ずつ繰り上げた。
- 7 第33条（公式ハンドシグナル）について、
 - (1) 主審と副審の公式ハンドシグナル（第1項）から「この場合、副審は主審のハンドシグナルに追従する。」を削除した。（第33条第1項2(1)）
 - (2) 審判員の公式ハンドシグナル（第7図）から
 - ① 「プレーボール」（①）を削除し、②以下を1ずつ繰り上げた。
 - ② 副審のハンドシグナルの表記を削除した。（④、⑩）
- 8 公式記録記入法等について所要の改正をした。
- 9 「ベンチ」を「チームベンチ」に改める等字句を修正した。（第1条第5項ほか）

3 ソフトバレー改正点・修正点

● 本年度の改・修正点

1 改正点

(1) チームキャプテンの権利と義務

チームキャプテンは、試合中、選手交代をしてコートを離れるときは、ゲームキャプテンとしての権利を失うため、コート内の選手から代理のゲームキャプテンを指名しなければならない。（Ⅱ-2 -(3)-3）

(2) チームの公式ウォームアップ

注解 チームの公式ウォームアップ時間については、大会運営や参加選手への負担を考慮し

主催者の判断により短縮することができる。(Ⅲ-2)

2 修正点

(1) 主審の責務

主審は、試合中、次の権限をもつ。

① 略

② 次のことを吹笛し判定する。(付則Ⅰ-(2)-2)-②)

(2) 公式ハンドシグナル

1) 主・副審のハンドシグナル

「副審は、主審のハンドシグナルを追従する。」を削除した。

2) 第2 図 主審と副審の公式ハンドシグナル

① 各ハンドシグナルに連番を付し、適用条項を加えた。

② 各ハンドシグナルを示すべき主審・副審の表示を修正した。

③ フットフォルトのハンドシグナルの手順を修正した。

3) 第3 図 線審のフラッグシグナル

① 各ハンドシグナルに連番を加えた。

② 「グッド」を「ボールイン」、「アウト」を「ボールアウト」に修正した。

(3) 字句と数値の修正を行った。

1) 「ベンチ」を全て「チームベンチ」に修正した。

2) 各図に図解で示すタイトルを入れた。

3) 選手の位置とローテーションに関する注解に、見出し等を加える修正した。

4) コートの交替に関する見出しに「コートチェンジ」を加え、合わせて「チェンジコート」を全て「コートチェンジ」に修正した。

5) ボールインとボールアウトの第6 図について、インプレーとなる許容空間を含めた図解に修正した。

4 ビーチバレー改正点・修正点

● 修正点

1 4.5.3 圧迫用サポーター(パッド入りの負傷部を保護する装具)は、保護やサポートのために着用することができる。

FIVB 世界・公式大会のシニアカテゴリーでは、これらのサポーターはユニフォームの部分と対応した色でなければならない。

2 6.1.3 ラリーと完了したラリー

ラリーとは、サーバーにより打たれたサービスの時点から、ボールがアウトオブプレーとなるまでの、一連のプレー動作である。完了したラリーとは一連のプレー動作の結果で1点を与えられたときをいう。これには、ペナルティやディレイインサービス(サービス時5秒ルールの反則)も含まれる。

3 11.3 ネットへの接触(CONTACT WITH THE NET)

11.3.1 ボールをプレーする動作中の選手による両アンテナ間のネットへの接触は反則である。ボールをプレーする動作には、(主に)踏み切りからヒット(またはプレーの試み)、着

地までが含まれる。

4 11.4.3 プレーに対する（主な）妨害

- ボールをプレーする動作中に、両アンテナ間のネット、またはアンテナに触れること。
- 支持を得たり、身体を安定させたりするために両アンテナ間のネットを使うこと。
- ネットに触れることにより相手チームに対して自チームが有利な状況を不正につくり出すこと。
- 相手チームによる正当なボールへのプレーの試みに対し、それを妨害する動作をすること。
- ネットをつかんだり、握ったりすること。

ボールがプレーされているときに、ボールの近くにいる選手やボールをプレーしようとしている選手は、たとえボールに触れなくてもボールをプレーする動作中とみなされる。

しかし、アンテナ外側のネットに触れることは反則ではない。（規則9.1.3 を除く）

5 21.2.3.1 副審は、主審のハンドシグナルを追従する。（削除）

6 21.2.3.3 主審によって次のサービスを行うチームを示す。

7 付則の2

1 セットマッチのときは、最小限2点差をつけて28点先取したチームがその試合の勝者となる。27-27の同点になった場合は、どちらかのチームが2点リードに達するまで試合は続行される。

8 付則の3

1セットマッチのときは、両チームの得点合計が7点の倍数（7, 14, 21, 28, 35, …）になるたびにコートスイッチをする。

9 4人制競技規則 「6 試合形式」

6.1 1セットマッチの場合

最小限2点差をつけて28点を先取したチームがその試合の勝者となる。27-27の同点になった場合、試合はどちらかのチームが2点リードに達するまで続行される。

● 修正点

規則をより読み易くするため、単語訳や表記を見直し、字句を修正した。

『平成27年度 指導部の目標と6人制の重点指導項目』

JVA国内事業本部 審判規則委員会 指導部

1 目標

- (1) 審判員は、公平な立場で試合を運営し、ルールを正確に適用して選手・観衆の目線に立ったレフェリングを心がけ、バレーボールの魅力を十分に引き出せるような審判実践を行う。
- (2) 審判員は、試合以外の場面でも役員、選手に対してチームに積極的にルールの理解を図り、コミュニケーションをとって相互の信頼関係を築けるように努力する。
- (3) 審判技術の向上を目指すために日々の研鑽に努める。

2 重点指導項目

【主 審】

I ネットへの接触・ネット近くの選手の反則

規則11.3および規則11.4の改正点について理解し正確に適用する。

- (1) 今回のルールの大きな改正点であるタッチネットについての理解をする。
- (2) 上記に関わるプレーに対する妨害について理解する。

II 判定について

(1) ネット際の判定

① タッチネット

「選手がボールをプレーする動作中」を理解して判定をする。

- ・ボールをプレーする動作中とは、ネット近くの選手（ブロッカーも含む）が助走→踏み切り→ヒット（試みを含む）→着地まで一連の動作で両アンテナ間のネットに触れたときの反則である。
- ・両アンテナ間のサイドバンド・網目の部分・アンテナに触れても反則となる。

※主審がタイムリーに判定できるように今までより視野を大きくするように注意する。

※ブロッカーがアンテナに触れたときの判定が逆になってしまうことがある。ネットやアンテナにボールや選手が近づいてきたときは、起こりうる反則を整理し準備をして判定する。

② プレーに対する妨害

- ・「支持を得たり、身体を安定させるためにネットをつかうこと。」とはネットに寄りかかりながらトスを上げたりするようなプレー。
- ・「ネットに触れることにより相手チームに対して、自チームが有利な状況を不正につくりだすこと。」とは、サーブがネット上端近くを通過する際、ネットを下げたサーブの失敗を防ぐような行為。
- ・「相手チームによる正当なボールへの試みに対し、それを妨害する動作をすること。」とは、ネットに打ち込まれたボールを、相手チームがネット越しに故意に触れてプレーを妨害すること。
- ・「ネットをつかんだり、握ったりすること。」とはボールの位置に関係なく、故意にネットをつかんだり、握ったりすること。

③ ブロックの判定

ブロック時のキャッチで明らかなものは反則である。

ボールをつかんで投げるような動作は、キャッチの反則である。

④ オーバーネットの判定

ネット上に視点を置き、ボールと手の接点を見て判定する。

- ・ブロッカーのオーバーネットは、セッターがトスを上げる前、上げた後、または同時にブロックしたとき
- ・ブロッカーが相手のアタックヒットの前、またはそれと同時に、相手空間内にあるボールに触れたとき

- ・相手から返球されてくるボールを、明らかにオーバーネットして、アタックヒットを完了したとき
- ・自チームからのトスを明らかにオーバーネットして相手チームへ返球するとき
- ・相手コートから返球される1回目、2回目のボールで、明らかにネットを越えてこないボールを、プレーヤーの有無にかかわらず、オーバーネットしてブロック行為（3回目のボールはその限りではない）をしたとき

(2) バックプレーヤーの反則に関する判定

- ① サービスのホイッスル前に、ポジションの確認をして、反則が起きた瞬間にホイッスルをする。セッターとバックアタックするプレーヤーの位置を確認しておく。特にセッターがフォワードのときは注意して確認する。
近年では、バックアタックの攻撃が男女とも多様化され、センターからのバックアタックが多くなっているため判定の方法を研究する。
- ② セッターがバックの場合、フロントゾーンで、ネットより完全に高い位置でトスしたボールが、直接相手コートにかえるか、または相手方ブロックに当たったときは反則となる。

(3) ハンドリング基準の確立

- ① 指を用いた2回目、3回目オーバーハンド
- ② シングルハンドトスの判定。多くはキャッチの場合が多い。ただボールが回転したからと反にすべきではない。

【副 審】

I ネットへの接触・ネット近くの選手の反則

規則11.3および規則11.4の改正点について理解し正確に適用する。

- (1) 今回のルールの大きな改正点であるタッチネットについての理解をする。
- (2) 上記に関わるプレーに対する妨害について理解する。

II 判定について

(1) タッチネットの判定

- ① タッチネットについては、副審もホイッスルする。
- ② 網目の部分の反則になる場合を確実に目を残しホイッスルする。また、インタフェアーになる場合も主審同様に理解をし、主審の補佐をする。

※ 副審はネット際を判定する際、ネットとブロッカーの間に視点がくるような位置取りをする。

※ 副審は、視点をネット際に残して判定する。（早くボールを追い過ぎない）

(2) アンテナ付近の判定

ボールがアンテナに触れたのか、選手がアンテナに触れたのか、どちらのチームが反則になったのか正確に判定ができるようにする。

※ ボールの位置によって、アンテナのタッチネットの反則が起きることをあらかじめ予測をして位置取りを工夫する必要がある。

(3) 許容空間外側のボール通過の判定

ボールを取り戻す場合のアンテナ付近の判定及びアンテナ付近を通過して相手コートに入る場合の判定では、ボールから離れすぎないように位置取りをして正確に判定できるようにする。

(4) バックプレーヤー及びリベロの判定

主審を補佐してタイムリーにホイッスルできるように、ラリー中、バックプレーヤーやリベロの動きを視野に入れ判定できる位置取りを速くする。

- ・ローテーションを1周する間に攻撃パターンを頭に入れ（セッターがフォワードのときの攻撃パターン）、ブロッカーとアタックラインが視野に入る位置取りができるよう研究する。
- ・バックアタックがあるチームの場合は、あまり前後の動きを大きくしないように工夫する必要がある。

Ⅲ 試合中断の手続きについて

(1) 選手交代

サブスティテューションの手順及び取扱いを十分理解し、スムーズに行えるようにする。

※ ピンチサーバーに関わる選手交代を要求した時に、リベロとリプレースメントした選手（被交代選手）がベンチやウォームアップエリア等にいる場合は、遅延の罰則を適用する。

(2) タイムアウト、テクニカルタイムアウト

① タイムアウトとテクニカルタイムアウト中とその後：

- ・中断の許可後、ベンチに下がるときにベンチ近くまで下がるようにコントロールし、モッパ―がフロントゾーンを折り返すまで確認し、主審とアイコンタクトを取る。
- ・記録が正確に記載されているか、また、中断の要求時のリベロの位置を確認する。
- ・支柱を背にして両ベンチが見えるように立ち、中断終了前にコートに入らないようにコントロールする。（ユニフォームが出ている選手がいれば、入れるように注意する等）

② タイムアウト後、コートに入ることが遅くなるような場合、ホイッスルとシグナルで促し繰り返す場合は何回もホイッスルして促さずに、遅延の罰則を適用するよう進言する。

③ ゲームの流れを読み、チームの要求に速やかに対応する。

ワンラリー毎にベンチコントロールを行い、ブザーがあるときは、ブザーに頼り過ぎないようにする。

(3) 最終セットのチェンジコート後、ラインアップシートで両チームのポジションを確認し、チェンジコート前の状態になっていることを、記録員と連携して確認する。タイムアウト、選手交代およびリベロのリプレースメントは、チェンジコート後すべてを確認した後、許可する。

【記録員】

規則 25. 2 責務を十分理解し、自身の責務を遂行する。

- (1) サービス順の確認、得点の確認をしながら、正確に記録をつける。疑わしいときは試合を止め、アシスタントスコアラー等に確認をしてミスが無いようにする。（JVISがある場合は、その情報も参考にする）
- (2) サービス順の誤りが発生した時は競技を再開する際、副審に両チームの正しいポジションを正確に伝えられるようにする。
- (3) プロトコール中に、コートのチームメンバーを記録用紙で確認をする。
- (4) ブザーがある場合、セット間終了合図はブザーで合図する。
- (5) サブスティテューションは、タイミング良くブザーを鳴らし、落ち着いて記録する。
 - ① チームが複数の選手交代の要求をした場合は、最初に1度だけブザーを鳴らす。
 - ② 同時に両チームから選手交代の要求があった場合は、片方のチームの選手交代を完了させた後、再度ブザーを鳴らしてからもう一方のチームの選手交代を行う。
- (6) 最終結果 (RESULTS) の集計を素早く行う。（例：セット毎にメモ用紙に集計していく）
- (7) 記載ミスをした場合は、二重線で消す。主審と副審が確認したときに誤りがあったときは、記録員が修正する。

【アシスタントスコアラー】

規則 26. 2 の責務を十分理解し、自身の責務を遂行する。

記録員と声を掛け合って、交代選手の番号や得点を確認し合う。

- (1) リベロのリプレースメントを正確に記録し、反則があった場合、ブザーを鳴らす。
- (2) タイムアウト、テクニカルタイムアウト中は、リベロの位置を副審に通告する。リベロ2人を持つチームの場合、リベロがコートにいるとき、番号も副審に通告する。
- (3) スコアボードの得点が正しいか確認する。
- (4) テクニカルタイムアウトの開始と終了を通告する。
 - ※ 1分をオーバーしないようにする。
- (5) 予備の公式記録用紙を準備し、必要があれば記録員に渡す。

【ラインジャッジ】

- (1) 担当するラインの判定を確実に行う。ボールコンタクトは、確実に見えた場合に限りフラッグシグナルを示す。
- (2) アンテナに関わる判定方法やボールを取り戻す場合の判定方法を確認し試合に臨む。
- (3) 選手がアンテナに触れた場合、フラッグを振りその選手を指す。

平成27年度 6人制ルールの取り扱いについて

1 競技参加者の行為に関する事項

規則 20 行為の条件 (REQUIREMENTS OF CONDUCT)

20.1 スポーツマンにふさわしい行為

- 20.1.1 競技参加者は、公式バレーボール規則に通じていなければならない。また、それを忠実に守らなければならない。
- 20.1.2 競技参加者は、審判員の決定に対し、スポーツマンらしく反論せず、受け入れなければならない。疑問がある場合には、ゲームキャプテンを通してのみ説明を求めることができる。
- 20.1.3 競技参加者は、審判員の決定に影響を与えたり、またはチームの反則を隠したりする行動や態度は避けなければならない。

20.2 フェアプレー

- 20.2.1 競技参加者は、審判員だけでなく、他の役員、相手チーム、チームメイト、さらに観衆に対しても、フェアプレーの精神で敬意を示し、礼儀正しく行動しなければならない。
- 20.2.2 チームメンバーは試合中、互いに話し合うことが許される。

(注)

- 1 競技参加者(スタッフ・競技者)が、規則20に反した場合、警告が与えられる。繰り返した場合は、ペナルティーを科せられる。
- 2 競技参加者が、JURYや審判員に向かって判定に対して執拗に抗議するような態度をとった場合、警告が与えられる。繰り返した場合は、ペナルティーが科せられる。
- 3 監督が副審や記録員に話しかけることができるのは、リベロの再指名の時や得点が正しくない時などの声掛け程度のものであり、説明を求めたり、長く話しかけるようなことはできない。
- 4 プレーイングエリア内で「ガム」を噛んだり、帽子をかぶることは許されない。
- 5 監督は、試合終了後、主審・副審にフェアプレーの精神で「握手」を交わす。

2 ネットへの接触についての事項

規則 11.3 ネットへの接触 (CONTACT WITH THE NET)

- 11.3.1 ボールをプレーする動作中の選手による両アンテナ間のネットへの接触は反則である。
ボールをプレーする動作の中には、(主に)踏み切りからヒット(またはプレーの試み)、着地

までが含まれる。

11.3.2 相手チームのプレーを妨害しない限り、選手は支柱、ロープ、またはアンテナの外側にあるネットや他の物体に触れてもよい。

11.3.3 ボールがネットにかかり、その反動でネットが選手に触れても、反則ではない。

規則11.4 ネット近くの選手の反則 (PLAYER'S FAULTS AT THE NET)

11.4.1 相手チームのアタックヒットの前、またはその最中に、選手が相手空間でボールもしくは相手選手に触れたとき。(規則11.1.1)

11.4.2 選手がネットの下から相手空間に侵入し、相手チームのプレーを妨害したとき。

11.4.3 選手の片方の足(両足)が相手コートに完全に侵入したとき。

11.4.4 プレーに対する(主な)妨害:

- ボールをプレーする動作中に、両アンテナ間のネット、またはアンテナに触れること。
- 支持を得たり、身体を安定させたりするために両アンテナ間のネットを使うこと。
- ネットに触れることにより相手チームに対して自チームが有利な状況を不正につくり出すこと。
- 相手チームによる正当なボールへのプレーの試みに対し、それを妨害する動作をすること。
- ネットをつかんだり、握ったりすること。

ボールがプレーされているときに、ボールの近くにいる選手やボールをプレーしようとしている選手は、たとえボールに触れなくてもボールをプレーする動作中とみなされる。

しかし、アンテナ外側のネットに触れることは反則ではない。

(注)

- 1 「ボールをプレーする動作中」とは、ボールをプレーしようとする選手の動作の開始から終了までの一連の動きと考える。例えば、アタックやブロックをする選手の場合、「動作の開始(助走も含む)から着地の動作の終了まで」、また、ボールが近くにある選手の場合、「プレーのための動作の開始からプレーをした(しようとした)動作の終了まで」を一連の動きとする。
- 2 速攻や時間差攻撃などで、どこにトスが上がるか判断できないタイミングで起きるネットへの接触は反則とするが、明らかに離れた位置にトスが上がった場合の接触は反則ではない。
- 3 アタックやブロックなどの動作が完全に終了した後、ボールが近くでない場合の振り向き時の接触は反則ではない。
- 4 プレーの終了後にネットにぶら下がったり、寄りかかったりする動作も反則である。

3 中断のためのブザーが鳴ったときの事項

規則8 プレーの状態 (STATES OF PLAY)

8.2 ボールアウトオブプレー (BALL OUT OF PLAY)

ボールは、審判員のうち1人がホイッスルをした反則の時点で、アウトオブプレーとなる。反則がなくても、ホイッスルの瞬間にアウトオブプレーとなる。

(注)

— ラリー中、ブザーが鳴ったときの対応について —

- 1 スコアラーからのブザーか、ベンチからのブザーかを確認する。
- 2 スコアラーからのブザーであれば、ホイッスルしてラリーを止め、内容を確認して判定する。
- 3 ベンチからのブザーであれば、ラリーを続け、ラリーが終了した時点で、「なぜ鳴ったか」「意図的かどうか」を確認し対応する。
- 4 ベンチからのブザーはあくまでも予鈴で、ブザーでラリーを止めることはしない。ラリーを止めるのはホイッスルである。

4 得点に関する事項

規則 6.1 得点すること (TO SCORE A POINT)

6.1.3 ラリーと完了したラリー

ラリーとは、サーバーにより打たれたサービスの時点から、ボールがアウトオブプレーとなるまでの、一連のプレーの動作である。完了したラリーとは、一連のプレーの動作の結果で1点が与えられたときをいう。これには、ペナルティやディレイインサービス（サービス時8秒ルールの違反）も含まれる。

(注)

- 1 何らかの理由でラリーが中断され、ノーカウントとなった場合、正規の試合中断やリベロリプレイスメントは認められない。
- 2 ただし、ラリー中に選手が負傷しラリーをノーカウントとした場合、その選手の選手交代やリベロリプレイスメントは認められる。

5 スタートラインナップに関する事項

規則 7.3 スタートラインナップ (TEAM STARTING LINE-UP)

7.3.5 コート上の選手のポジションが、ラインアップシートと違う場合には、次のように対処する：

7.3.5.1 セットの開始前に違いが発見された場合は、選手のポジションはラインアップシートどおりに改めなければならない。この場合には制裁はない。

7.3.5.2 セット開始前、そのセットのラインアップシートに記入されていない選手がコート上にいることが発見された場合は、この選手はラインアップシートに従い変更されなければならない。この場合には制裁はない。

7.3.5.3 しかし、監督がそのようなラインアップシートに記入されていない選手をそのままコートでプレーさせたい場合には、監督は正規の選手交代を、該当するハンドシグナルを用いて要求する必要がある、記録用紙に選手交代が記録される。

もしもラインアップシートと選手のポジションの違いが、もっと遅い時点で発見された場合は、

間違いのあったチームは、正しいポジションに戻さなければならない。相手チームの得点はそのまますべて有効で、さらに1点と次のサービスが与えられる。間違いをした時点から発見されるまでに、間違いのあったチームが得たすべての得点は取り消される。

7.3.5.4 記録用紙の選手のリストに登録されていない選手がコート上にいることが発見された場合は、相手チームの得点はそのまますべて有効で、さらに1点と次のサービスが与えられる。間違いのあったチームは、登録されていない選手がコートに入った時点から得たすべての得点とセット（必要であれば0-25として）を失い、修正したラインアップシートを提出し、登録されていない選手がいたポジションに、登録されている選手を新たにコート上に送らなければならない。

(注)

1 セットの開始前、ラインアップシート通りに位置していない場合

① 副審は、ゲームキャプテンを呼び、チームから提出されたラインアップシートを示し、選手のポジションの確認を行う。

2 セットの開始前、ラインアップシートに記入されていない選手がコート上にいる場合

① 副審はラインアップシートを監督に示し、記入されていない選手がコート上にいることを告げ、ラインアップシートどおりに変更するよう指示する。

② 監督がラインアップシートに記入されていない選手をコートに残すことを要望する場合は、両チームのラインアップを確認後、副審は正規の選手交代を認めなければならない。
この場合、監督は選手交代のハンドシグナルを示し、正規の選手交代を要求する。

③ この際、ラインアップシートどおりに選手をコートに戻す。

④ 副審は、ハンドシグナルを確認後、ホイッスルをし、要求を受け付け、正規の選手交代を行い、記録員に選手交代を記録させる。

6 試合の遅延に関する事項

規則 16.1 遅延行為の種類 (TYPES OF DELAYS)

試合の再開を引き延ばすようなチームの不当な行動は、遅延行為である。主なものは以下のとおり：

16.1.1 正規の試合中断を遅らせること。

16.1.2 試合を再開するよう指示された後、中断をさらに引き延ばすこと。

16.1.3 不法な選手交代を要求すること。

16.1.4 不当な要求を繰り返すこと。

16.1.5 チームメンバーが試合を遅らせること。

(注)

1 サーバーがボールリトリバーからのボールを故意に受け取らなかったり、普通にサービスゾーンに来なかったりした場合には、チームは遅延行為に対する罰則を受ける。

2 TO及びTTOの終了後、コートへ戻る行為が遅い場合も遅延行為となる。

3 選手やベンチスタッフが、床の濡れた部分を拭くために、審判員やモッパーにモップの要求をすることはできない。その要求は、遅延行為の対象となる。

7 スクリーンに関する事項

規則 12.5 スクリーン (SCREENING)

12.5.1 サービングチームの選手は、1人または集団でスクリーンを形成し、サーバーおよびサービスボールのコースが相手チームに見えないように妨害をしてはならない。

12.5.2 サービスが行われるとき、サービングチームの1人または複数の選手が集団で腕を揺り動かしたり、左右に動いたりして、あるいは集団で固まって立ち、サーバーおよびサービスボールのコースを隠すことでスクリーンが形成される。

(注)

- 1 スクリーンを形成していることが明らかな場合、チームに対して注意が与えられる。再発した場合は、マイナーミスコンタクトとして罰則を適用する。
- 2 スクリーンの反則が成立するのは、サービングチームの選手の妨害によって、サービスをレシーブする選手が、サーバーおよびサービスボールの軌道を隠されて、見えなくなる時である。

8 競技エリア (PLAYING AREA) に関する事項

規則 1.1 規格 (DIMENSIONS)

コートは 18 m × 9 m の長方形で、最小限 3 m の幅のフリーゾーンで囲まれている。フリープレー空間は、障害物が何もない競技エリアの上方の空間で、競技をする表面から、最小限 7 m の高さがなければならない。

国際バレーボール連盟（以下 FIVB）世界・公式大会では、フリーゾーンの幅はサイドラインから最小限 5 m、エンドラインから最小限 6.5 m なければならない。フリープレー空間は競技エリアの表面から最小限 12.5 m の高さが必要である。

(注)

フリーゾーンの幅については、国内競技要項に基づき各大会実行委員会等が決定する。

9 副審のハンドシグナルに関する事項

(注)

- 1 主審が反則をホイッスルした場合、副審は、ハンドシグナルを追従しない。
- 2 副審が反則をホイッスルした場合、反則の種類、反則した選手の順に、反則したチーム側でハンドシグナルを示し、主審が「サービスを行うチーム」を示した後に、ハンドシグナルを追従する。